

日本陸軍航空史（その16） ～南方攻略に伴う航空運用（2）～

1 はじめに

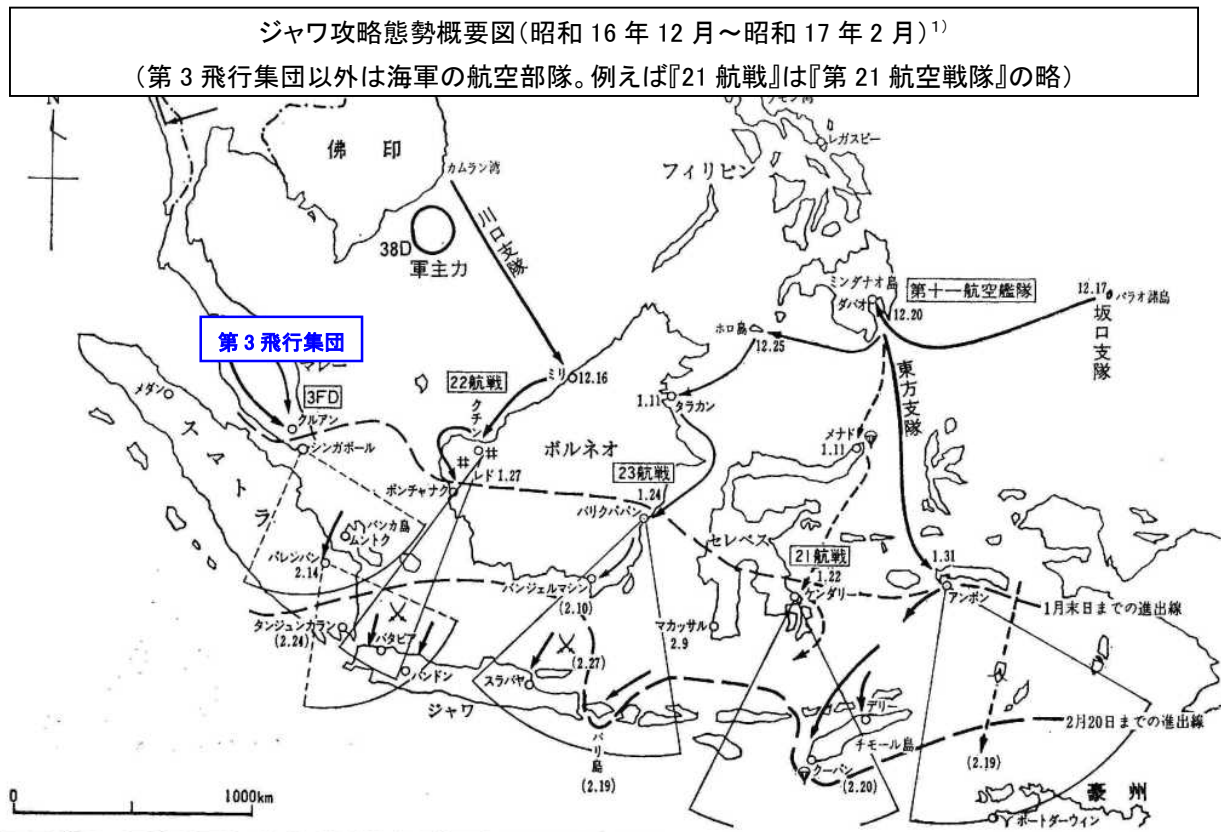
『戦略の本質』（参考文献 2。日本経済新聞出版社刊）には、日本から見た大東亜戦争の戦略的局
面が、『戦略的攻勢』（昭和 16 年 12 月の開戦から昭和 17 年中ごろまで）、『戦略的対等』（昭和 17
年中ごろから昭和 18 年前半まで）、『戦略的守勢』（昭和 18 年前半から昭和 19 年 6 月のマリアナ沖
海戦まで）及び『絶望的抗戦』（昭和 19 年 6 月以降、昭和 20 年 8 月の終戦まで）の四つに区分される
と述べられています。「昭和 17 年中ごろ」というのは、昭和 17 年 6 月のミッドウェー海戦が重要な転換
点であったことからだろうと思います。

今回は、昭和 17 年 1 月末～2 月末のマレー作戦とパレンバン攻略における航空運用の概要につ
いて述べます。

2 蘭印の重要性¹⁾³⁾

蘭印（オランダ領インドネシア）には、石油、ゴム、砂糖などの天然資源が豊富にあり、特に石油は、
年産約 800 万キロリットルで、パレンバンだけで 375 万キロリットルの生産能力でした。昭和 16 年 3 月
ころの陸軍の貯蔵量は 40.5 万キロリットルで、全力で作戦した場合、月量 3.38 万キロリットルを消費す
るという前提のもと、約 12 ヶ月分しかないと見積もられていましたので、陸軍としても蘭印の石油施設を
無傷に近い状態で手に入れるというのは、必成目標でした。¹⁾

蘭印攻略のためには、シンガポールとマニラを攻略しなければならず、このため、マレー作戦はシン
ガポール攻略を最終目標として開始されることになりました。シンガポールは英国にとってインド防衛の
東門であり、豪州防衛のための北門でした。³⁾



3 航空情勢判断と第3飛行集団戦闘司令部の南部マレー推進¹⁾

昭和17年1月31日、第25軍は早くも、シンガポール島の対岸ジョホールバルに突入しました。この日、司偵機の偵察によると、シンガポール島の4飛行場には、合わせて大型機9機、中・小型機約30機が認められ、またパレンバンでは、4発超大型機1機、大型機9機、中型機11機及び小型機9機を発見しました。南方軍は、スマトラ方面の敵航空機は、急速に増強されていると見積りました。

また同日、第3飛行団の飛行第27戦隊(99襲撃)及び飛行第59戦隊(隼)の一部がクルアン飛行場に推進し、2月2日には第3飛行団の主力が同飛行場に推進して、指揮所を設けました。

4 パレンバン空挺作戦¹⁾⁴⁾

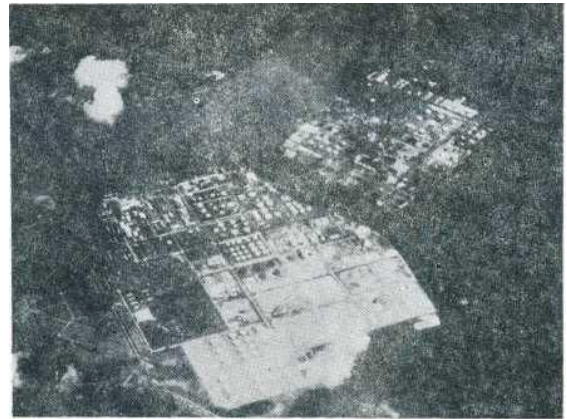
(1) 陸海軍現地協定¹⁾

昭和17年1月23日、サイゴン総司令部において、空挺作戦の検討が行われました。

海軍陸戦隊3,200名は1月11日、セレベス島メナドへの単独進攻を成功させますが、その際に南方に隣接するランゴアンに334名をもって日本軍初の空挺作戦を成功させています。

しかし大本営は、陸軍の顔を立てるためというよりも、次回の陸軍の空挺作戦秘匿のために公表せず、これをパレンバン空挺作戦の成功と併せて発表します。

海軍はこの後、2月20日にもチモール島クーバンにおいて空挺作戦を成功させています。



パレンバン精油施設¹⁾

メナド占領後まもなくの昭和17年1月17日、米軍のB-24×3機、B-17×2機が同地を攻撃してきましたが、邀撃に飛び上がった海軍の零戦は20mm弾をすべて撃ちつくしても、撃墜できませんでした。そして、この情報は陸軍に伝えられます。敵の防弾能力が格段に向上していたのです。これ以降、やむを得ず体当たりが敢行されるようになります。

さて、パレンバン攻撃については、他の飛行場に降着して移動攻撃する案も出ましたが、「挺進部隊の運用は、直接降下しかあり得ない」という第3飛行集団長の意見が採用されました。南部スマトラ作戦は『L作戦』と名づけられ、第3飛行集団の作戦は『L航空作戦』と名づけられました。

昭和17年1月28日、第3飛行集団長は、南遣艦隊司令官及び第16軍司令官とともに、『L作戦』に関する綿密な航空協定を結びました。これによりまずと、第38師団先遣隊のムントク(スマトラ島近くのバンカ島の町)上陸日を、作戦名とまぎらわしいのですが、『L日』とし、これを2月10日と予定しました。



出発前の挺進降下隊員¹⁾

(2) 指揮の統一¹⁾

1月31日、『挺進作戦決行に関する南方軍命令』が出され、第1挺進団は第3飛行集団の指揮下とされました。「飛行及び降下後の掩護を容易にするため」という第3飛行集団長の意見具申によるものでした。

また、降下時期は攻撃部隊主力との連携上最も有利な、『L-1日午前中』とされましたが、『午前中』としたのは、気象担当・日下部文雄航技少佐の局地気

象研究の結果、早朝に霧が発生し、日の出とともに霧が上昇して層雲になり、午前10時以降はそれが積雲、午後には積乱雲となるという見積もりからでした。

(3) 挺進第2聯隊の起用¹⁾

空挺部隊は、当初、**第1挺進団の挺進第1聯隊**でしたが、南方推進のために乗船していた『明光丸』が昭和17年1月3日、三亜沖で、搭載していた焼夷弾の自然発火のために沈没し、隊員は駆逐艦3隻によって救助されて、バンコクに上陸しました。この際、兵器・器材のほとんどを失いました。

そのため急遽、**挺進第2聯隊**が編成され、降下回数4回程度の基幹要員60名に特別訓練を行い、藤倉航空工業(株)の昼夜兼行による落下傘製造等の努力により、迅速に**2コ聯隊分の装備品**を揃えて、1月15日に門司港を出港し、2月3日、プノンペンに上陸しました。

挺進第1聯隊と**挺進第2聯隊**は先陣を譲ろうとしましたが、困った**挺進団長・久米精一大佐**は、第1聯隊を「病後静養を要する」という名目で休ませることにしました。

(4) 航空機の準備¹⁾⁴⁾

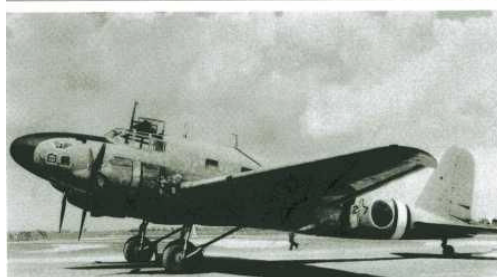
挺進団長は、要員を飛行場確保260名、精油所確保130名と計画し、輸送機40機の準備を指示しました。**挺進飛行隊長・新原少佐**は、**第1・第2中隊のロ式輸送機22機**と**第3中隊の百式輸送機12機**及び内地で改編した**第12輸送飛行中隊(ロ式9機)の6機**を合わせて**40機**を準備しました。

立川 ロ式輸送機(ロッキード14WG-3)(昭和14年)



[ロッキード14型スーパー・エレクトラのライセンス国産型]全幅:19.96m、全長:13.42m、全備重量:7,100kg、**発動機:三菱九九式 850HP×2**、最大速度:418km/h、航続距離:2,700km、武装:なし、乗員:3名、乗客8~10名⁴⁾

三菱 一〇〇式輸送機[キ57](昭和15年)



[2型・写真の機体は民間型MC-20]全幅:22.60m、全長:16.10m、全備重量:8,140kg、**発動機:三菱一式 1,050HP×2**、最大速度:470km/h、航続距離:1,500km、武装:なし、乗員:4名、乗客11名(標準)⁴⁾

上記の各輸送機には、『ラ装置』と呼ばれる**落下傘降下用装置**が装備されていました。

海軍は飛行場整備が遅れたことを理由に『L日』を当初2月12日、その後さらに延期するよう要求し、結局、『L日』は2月15日になりました。

(5) 事前航空撃滅戦¹⁾

○ 2月6日

パレンバン飛行場に大型機6機、中型機50機という2月5日の偵察結果を踏まえ、**集団長**は、**第3飛行団**全力による航空撃滅戦を命じました。**飛行第64戦隊(隼:第7飛行団)18機**、**飛行第59戦隊(隼)14機**、**飛行第75・第90戦隊(99軽爆)33機**で攻撃しましたが、雲が多くて戦爆の協同ができず、1700過ぎに**第64戦隊**は止むを得ず単独で攻撃し、在地60機を二撃して、撃破11機(炎上1、不確実5を含む)と報じました。また、**第59戦隊**は15分遅れて進入し、空戦ののち、ハリケーン8機(うち不確実3)、ブレンハイム4機(うち不確実1)、ビューフォート1機(不確実)を撃墜し、地上のブレンハイム3機及びロッキード・ハドソン1機を撃破して帰還しました。

軽爆戦隊は、雲のためにパレンバン飛行場を視認できず、対岸のバンカ島ムントク飛行場を爆撃しました。

○ 2月7日

7日早朝、パレンバン飛行場に残存機 30 数機を認め、第 3 飛行団長は午後、隼 31 機と 99 軽爆 6 機を進攻させました。その途中の 1437、船団護衛中のブレンハイム 6 機と遭遇し、4 機を撃墜しました。そして、1530、パレンバン飛行場に進入した爆撃機は在地 14 機を爆撃(うち炎上 4)、戦闘機はハリケーン 15 機(うち不確実 5)、ブレンハイム 4 機、ロッキード 2 機(うち不確実 1)を撃墜し、さらに地上の 10 機炎上、6 機撃破の戦果を挙げました。

この間、加藤部隊の操縦士は全員激しい腹痛に見舞われました。原因は、マレー半島カハン飛行場への飛行部隊の推進に糧食の補給が間に合わず、炊事係が野草を調理したためでした。

○ 2月8日

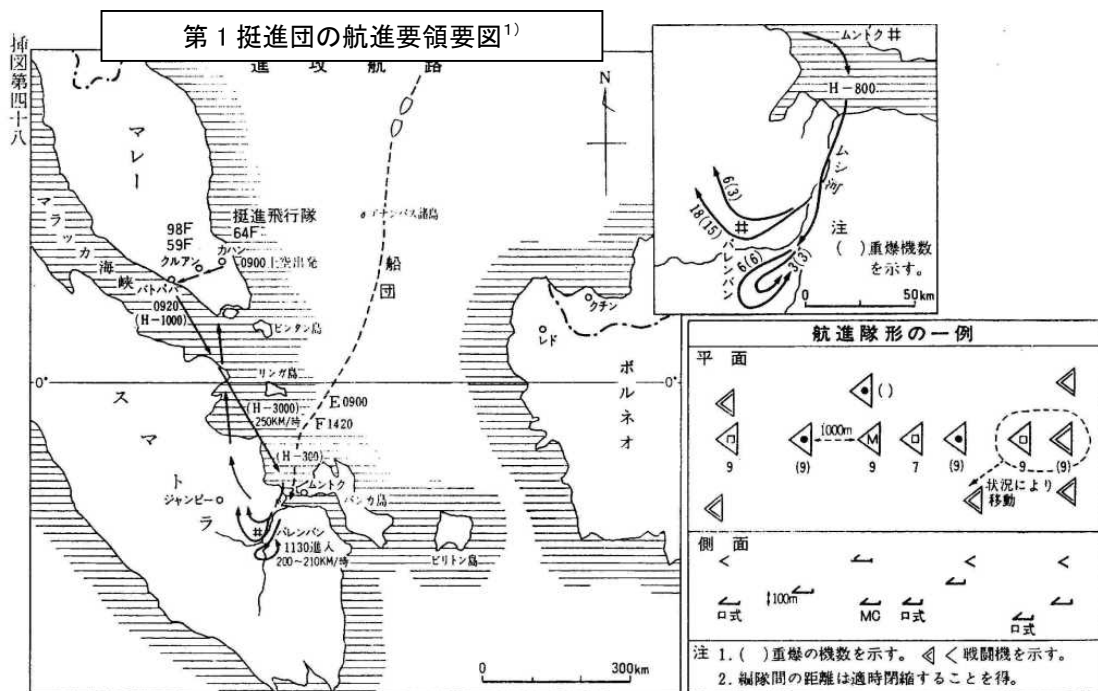
8日にも隼 25 機と 99 軽爆 17 機が進攻し、軽爆は超低空爆撃により在地 15 機を爆撃して 9 機を炎上させ、戦闘機はハリケーン 4 機と空戦して 2 機を撃墜し、パレンバン地区を制圧しました。

(6) 挺進作戦の成功¹⁾

○ 再度の事前攻撃

2月11日、第1挺進団長は挺進決行の命令を下達し、自らは第16軍井戸田参謀らと輸送機に乗り組み、速射砲(対戦車砲)を積み込んで、パレンバン地区に強行着陸することにしました。団長自らがこのように果敢な行動をとるといのは、驚きです。

そして、2月13日、隼 29 機と 99 軽爆 7 機がパレンバン飛行場に再度攻撃をかけ、ハリケーン 5 機(うち不確実 2)を撃墜し、在地大型機 4 機を撃破しました。この際、第 64 戦隊の名編隊長として抜群の功績を挙げていた国井正文中尉が散華されました。4月29日、菅原集団長から国井中尉に個人感状が授与されました



甲村聯隊長は、聯隊本部及び三谷第 4 中隊を率いて飛行場に向い攻撃前進しました。1430 ころ、先頭の第 4 中隊第 1 小隊(小隊長・大城隆中尉)が約 10 両の自動貨車を攻撃しましたが、今度は向ってきた約 30 両の車両群と遭遇しました。すると大城中尉は鹵獲した軽装甲車に搭乗して車両群に突進し、先頭の 5～6 両が混乱する間に、第 4 中隊主力の約 60 名が敵兵約 300 名の側背を攻撃し、1730 ころまでに敵を敗走させました。

聯隊は 1920 過ぎに飛行場事務所を占領し、飛行場西側に降下した第 2 中隊も 2100 に合流しました。14 日夜時点で降下人員の 55%にあたる 133 名を掌握し、小銃 50 挺、軽機関銃 5 挺(銃の 40%)を回収しましたが、通信機が回収できず、精油所方面の状況は不明でした。

○ 精油所方面の地上戦闘

西精油所西側に降下した第 1 中隊長・中尾基久男中尉以下 60 名はトーチカを利用して抵抗する敵を攻撃し、1410、完全に西精油所を確保しました。

東精油所南側に降下した長谷部小隊 30 名は、1230、兵営方向に攻撃しましたが敵の防御が固く、夜襲に切り替えて、2300 兵営南東側を奪取、15 日 0100、東精油所を占領しました。0600、東精油所に仕掛けられた時限爆弾が爆発しましたが、主要精油施設は無事でした。

○ 挺進団長以下同乗者の主力合流

ムシ河近くの湿地に胴体着陸した久米挺進団長の一隊は、各所で敵の警戒線に遭遇し、さらにはジャングル地帯のために行動の自由が奪われ、降下部隊主力に合流できたのは 15 日朝でした。

挺進団本部及び第 2 聯隊の損害は、戦死 37 名、戦傷 47 名、合計 84 名であり、戦闘後の調査で、飛行場守備兵は蘭軍大佐率いる英、蘭、豪約 530 名、精油所守備兵は蘭軍大尉指揮の 550 名と判明しました。飛行場地区では 2 倍、精油所地区では 6 倍の敵を撃破したことになります。

(7) 第 3 飛行集団のパレンバン推進¹⁾

2 月 15 日天明とともに、第 15 独立飛行隊(隊長・中濱中佐、百式偵察 2 機)はクルアンを出発、1030 にパレンバンに着陸し、無線機を輸送しました。装備が回収できていないことを知った集団長は、小銃、軽機、弾薬等を重爆 2 機に積み込み、15 日夕刻、パレンバンに送り込みました。

また、集団長は、第 12 飛行団(戦闘機:飛行第 1・第 11 戦隊)の一部をパレンバンに推進するよう命じ、15 日午後、飛行第 11 戦隊の 8 機が到着し、防空任務に就きました。1340 には第 2 次挺進部隊がパレンバン飛行場に降下しました。

1820、飛行第 11 戦隊の地上勤務員もパレンバンに到着し、薄暮までに戦隊主力が到着して、態勢を確立しました。

(8) 第 38 師団先遣隊のパレンバン推進¹⁾

第 38 師団先遣隊は、2 月 13 日夕刻、敵機の来襲を受けましたが、被害はなく、14 日 0600 ころリング島ジャン岬東方約 80 キロを南下、0830 ころ 3 機、1230 ころ 6 機の来襲があったのですが、被害がなく、1000 以降は海軍機の掩護下に航進を続けました。

そして 15 日、先遣隊はムントク泊地に到着、同日 0830 からムシ河を遡上して 1900 にパレンバン港に入りました。第 1 挺進団と提携できたのは 2100 でした。

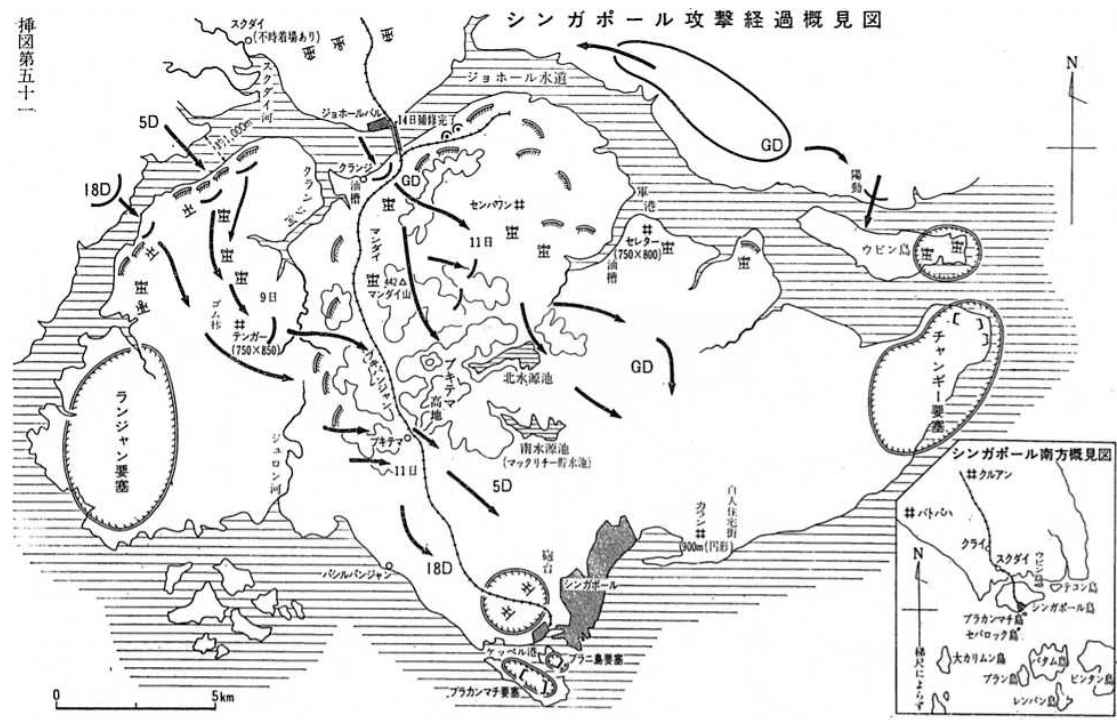
5 シンガポール攻略支援航空作戦¹⁾³⁾

(1) 事前の要地攻撃と航空撃滅戦¹⁾

英空軍は、1月末にはシンガポール島内の4飛行場に圧迫されていました。2月4日、第3飛行集団長はクルアンにおいて、『パレンバン挺進』及び『シンガポール攻略支援』の両作戦命令を下达し、シンガポール攻略開始は2月7日夜と予定されました。

第3飛行団、第7飛行団(戦闘1コ戦隊、重爆3コ戦隊)及び第12飛行団は2月1日から7日までの間、センバワン、セレーター及びクランジの各油槽群、セレーター、カラン及びパカンバルの各飛行場、シンガポール埠頭、チャンギー要塞等の各軍事施設等を爆撃しましたが、概して高射砲の射撃は少なく、戦闘機による邀撃もほとんどありませんでした。また、艦船に対しては、1万トン級轟沈1隻、3千トン級3隻に命中弾、大型船2隻炎上等の戦果を挙げました。

そして、2月6日にはシンガポール上陸作戦の開始が2月8日2400と決定されました。



シンガポール攻撃経過概見図¹⁾

(2) 第25軍攻撃への直接協同¹⁾

○ 2月8日の状況

2月8日早朝、近衛師団の一部はウビン島に上陸して陽動作戦を開始し、軍偵は頻繁に同方面を飛行して、陽動作戦に寄与しました。また、第3飛行団の一部は第18師団渡河正対岸の敵探照灯陣地及び砲兵陣地を爆撃しました。

同日、第7飛行団はブキパンジャン及びマンダイ付近の敵陣地並びにチャンギー要塞を攻撃し、第12飛行団は97戦延べ75機及び2式戦・鐘馗6機をもって上空を掩護しました。そして同日2400、第5・第18師団は、予定どおり渡河を開始しました。

○ 2月9日から11日までの状況

第5師団は、2月9日1400にはテンガー飛行場北端に進出しました。第3飛行団は、飛行第90戦隊(双軽)で第5師団、飛行第75戦隊(双軽)で第18師団を直接支援させるとともに、飛行第59

戦隊(隼)で上空掩護をさせました。

この日、**第25軍の軍砲兵隊**は、**独立気球中隊**及び**第83独立飛行隊**直協機の観測によって敵砲兵を制圧し、軍防空隊は来襲した敵戦闘機12機のうち、4機を撃墜しました。**気球部隊**は砲兵に所属して存続していたようです。

2月10日、**第3飛行団**は、襲撃、軽爆各延30機、戦闘機延20機を以て地上作戦に協力し、**第12飛行団**は、0800から2020まで、97戦延110機、2式戦延5機を以て第一線上空を制空しました。

また、**第7飛行団**は、5次、延93機で敵の陣地、部隊、停車場及び埠頭を爆撃し、総弾量58トン投下しました。

2月11日、**テンガー飛行場**の山下奉文軍司令官は、**独立飛行第71中隊(軍偵)**で降伏勧告文29通を通信筒に入れて敵陣地に投下しましたが、反応はありませんでした(英公刊戦史によると、**パーシバル中將**はこのとき、抗戦の意志を固めたそうです³⁾)。**第7飛行団の97重3コ戦隊**は延115機が出動して、敵砲兵陣地、埠頭及び船舶を爆撃し、78トンの爆弾を投下しました。**2月9日から11日**までに、**同飛行団**は17回出動し、延313機、209トンの爆弾を投下しました。

○ 2月12日の状況

2月12日、第25軍は、弾薬の追送が途絶えて歩砲分離となり、敵の頑強な抵抗に遭いました。特に**ブラカンマチ要塞砲**が第25軍の右翼、**第18師団**の側方に猛射を加えたために前進できず、**集団長**は**第7飛行団**に対して海岸砲台の爆撃を命じ、**同団**は、10次、延105機にわたって、**ブラカンマチ**、**チャンギー**及び**パシンパンジャン**の各要塞に約70トンの爆弾を投下しました。

特に、**同団の飛行第60戦隊**は、最南端の**ブラカンマチ要塞**の爆撃を命ぜられ、同要塞を全力で制圧しました。また、**第12飛行団**は延64機を以て制空にあたり、**第3飛行団**は一部を以て地上作戦に直接協力するとともに、主力は、島から脱出する敵船舶を攻撃しました。

船舶については、1万トン級輸送船1隻撃沈、同2隻炎上、3千トン級船舶1隻炎上のほか、多数の船に命中弾を与えました。

○ 2月13日の状況

2月13日、**第7飛行団**は、爆撃目標をシンガポール周辺の敵陣地に変更し、1014から1525の間、主として**第12戦隊**及び**第60戦隊**により、延94機、60トンの爆弾を投下しました。

海軍航空隊は、12日及び13日、中攻約80機を以て**バンカ海峡**及び**シンガポール海峡**方面に出撃し、商船2隻、巡洋艦1隻の撃沈を報じました。

○ 2月14日の状況

2月14日、敵砲兵は、シンガポールの西方丘陵からさかんに射撃しており、やっと**ジョホール水道**の陸橋の補修が完了したものの、**第25軍砲兵隊**の推進がはかどらず、前線では依然として敵砲兵の集中射撃で進めない状況でした。

しかし、この日は、**パレンバン空挺作戦**の日であり、シンガポール攻略には十分な航空戦力を充当できない状況でした。そのような状況下で、**第7飛行団**は7次にわたりシンガポール市西方地区の敵重砲陣地及び埠頭を爆撃しました。また、**第12飛行団**は、シンガポール上空を掩護するとともに、**スマトラ島パカンバル飛行場**を攻撃し、**ブレンハイム**4機、小型複座機1機を撃破しました。

いっぽう、**海軍中攻隊**は、商船等3隻撃沈、8隻中・小破の戦果を報じました。

(3) シンガポールの陥落¹⁾

○ 英軍の降伏

2月15日の第25軍司令部内は重苦しい雰囲気、勝利の日は遠いように思われました。

この日、第3飛行団は、襲撃機32機、軽爆十数機を以て地上戦闘に協力するとともに、第7飛行団は、10次、延108機、85トンにわたってブランカマチ要塞等を爆撃しました。第7飛行団の2月上旬以降の出撃機数は延1,018機、総弾量は773トンに及びました。

いっぽう、英印軍は、今や航空優勢を日本軍に奪われて一方的に爆撃や射撃をやられ放題で、シンガポールから逃げようとする船舶も多くが沈められており、かなり追い詰められていました。

決定的だったのは、2月14日にパレンバンが占領されて英印軍の後方に脅威を生じたということだったと思われませんが、2月15日1950、軍司令官山下中将は、マレー英軍司令官パーシバル中將から正式に降伏の申し出を受け、2000を以て停戦が成立し、シンガポール攻略作戦が終了しました。



英海岸砲台に対する爆撃の跡¹⁾

○ 昭南の呼称

2月17日、大本営は、シンガポールを『昭南』と改称すると発表しました。「昭は照らすことであり、永い間の暗雲を除き、すべての物に何ら差別なく太陽の光と恵みをあまねく及ぼしたい。昭南の土地こそ必ずその名の示すようにこの方面における光明の一大軸心、基点となる島(港)となろう」という心からの願いを表明したものであったそうです。

第25軍に配属され、多大なる貢献をした第83独立飛行隊(隊長・二田原憲治郎大佐。独立飛行第71・第73中隊(軍偵)、独立飛行第82中隊(軽爆)、第85・第88飛行場中隊)には、山下軍司令官から感状が授与されました。

6 マレー作戦における彼我の損害¹⁾³⁾

(1) 日本軍の損害³⁾

マレー半島作戦55日間とシンガポール作戦7日間の死者数はほぼ同じで、戦傷者数は後者のほうが上回りました。特に、シンガポール作戦の損害の4割が上陸前ということから、熾烈な戦闘が行われたことがうかがえます。

日本軍(第25軍)の損害

(単位:人)

マレー半島作戦 (S16.12.8~S17.1.31)		シンガポール作戦 (S17.2.9~2.15)		合計
戦死	戦傷	戦死	戦傷	
1,793	2,772	1,714	3,378	戦死 3,507 戦傷 6,150 合計 9,657
参加兵力 約3万5千		損害の約4割は、上陸前に生じたもの		

(2) 英印軍に与えた損害³⁾

英印軍に与えた損害

マレー半島作戦 (S16.12.8～S17.1.31)		シンガポール作戦 (S17.2.9～2.15)		合 計
主な鹵獲兵器等	人 員	主な鹵獲兵器等	人 員	
飛行機 13 装甲車 約 50 自動車 約 3,600 各種火砲 約 330 重(軽)機関銃 約 550 機関車・貨車 約 800	交戦英軍兵力 約 8 万人 与えた損害 約 2 万 5 千人 うち捕虜 約 8 千人 英印軍 5 コ旅 団が壊滅	飛行機 10 戦車(装甲車) 200 野山砲 約 300 高射砲 約 100 要塞砲 54 機関車・貨車約 1,000	捕虜 約 10 万人	人的損耗 138,708 人 英国 38,496 人 豪州 18,490 人 印度 67,340 人 義勇軍 14,382 人 うち捕虜 13 万人以上
(日本軍資料による)		(日本軍資料による)		(英公刊戦史による)

(3) 第 3 飛行集団の損耗¹⁾

第 3 飛行集団(2 月 8 日現在、将校約 1,200 名、下士官約 4,400 名、兵約 19,300 名、合計約 24,900 名)の人的損耗は非常に多く、開戦前から 3 月 11 日までの損耗数は 511 名で、約半数の 243 名は空中勤務者(操縦 120 名、その他 123 名)でした。

参考文献 1 によりますと、空中勤務者の損耗率は、マレー作戦の最初の 1 ヶ月が 13～14%、2 ヶ月目は 19.5%に達したそうです。それに対する補充は、わずか 3 割の 83 名(操縦 56 名、その他 27 名)で、地上勤務者の補充はありませんでした。

航空機については、新鋭機ほど使用頻度が高く、その分、損耗も多く出ました。補充できたのは全体の 66%でした。

第3飛行集団・航空機損耗・補充数(集中時期から昭和17年2月末まで)

(単位:機)

機 種	携行数	損 耗/補 充 数				合 計
		集中時	12月	1月	2月	
97 司偵	33	2	4/5	2/1	2	10/6
百式司偵	20	2	5/4	3/3	2/7	12/14
99 軍偵	20		9/5	8/1	3/2	20/8
98 直協	13		3	2	1/7	6/7
97 戦	132	3	16/26	32/22	14	65/48
1 式戦	64		34/19	23/26	16/3	73/48
97 軽爆	42		1/3	3	1/1	5/4
99 双軽	82	3	12/15	15/16	21/15	51/46
99 襲撃	37	5	20/12	7/5	8/15	40/32
97 重(I)	35		10/5			10/5
97 重(II)	129	16	16/21	15/6	9	56/27
2 式戦				3		3
97 輸	55		4	2	1	7
百式輸				1	3	4
ロ式輸					11	11
計	662	31	134/115	116/80	92/50	373/245

7 第1野戦補充飛行隊の行動¹⁾

昭和16年11月30日、「第一線飛行部隊空中勤務者の適時適切な補充」を目的とする部隊として、第1野戦補充飛行隊が濱松で編成されました。

この部隊は、『偵察隊』が97司偵×6機、99軍偵×3機、98直協×3機、『戦闘隊』が97戦×9機、『軽爆隊』が98軽爆×5機、『重爆隊』が97重爆I型×9機、同II型×5機という内訳で編成され、12月15日以降台湾に集中しました。

しかし、この集中間に、97戦×5機、97重爆I型×5機、同II型×3機が不時着し、飛行隊長坪内剛直中佐も、輸送機の故障のために、奄美大島名瀬湾沖で不時着するなど、死者、行方不明者が続出しました。この原因は、隊員の練度不足と装備機の整備不良だったようです。

したがって、開戦後、12月中旬までの損耗に対しては対応ができず、南方軍が同飛行隊を掌握した12月末には、まだ台湾にいましたが、12月27日にスゲイパタニ飛行場空襲で受けた大損害に対してはなんとか応急補充ができました。

昭和17年1月末、飛行隊はプノンペン及びコンポントラッシュに進出し、空中勤務者の練成を開始しました。しかし、隊員の飛行時間は200時間から300時間で、練度は低い状態でした。また、教官や整備員のレベルにも差があり、練成訓練は容易ではなかったようです。

しかし、前線からの欠員補充の要望は強く、練成不十分のまま送り出される者が多かったようです。また、1式戦及び百式司偵が教育用として配分されたのは、シンガポール作戦が終わってからでした。

おわり

次回は「南方攻略に伴う航空運用(3)」

< 参 考 文 献 >

- 1) 「戦史叢書 南方進攻陸軍航空作戦」(昭和45年3月 防衛庁防衛研修所戦史室)
- 2) 「戦略の本質 戦史に学ぶ逆転のリーダーシップ」(平成20年8月 野中 郁次郎ほか5名共著 日本経済新聞出版社)
- 3) 「マレー作戦 第二次世界大戦史」(昭和44年3月3版 陸戦史研究普及会 編 原書房)
- 4) 「日本軍用機事典 陸軍篇」(平成17年9月 野原 茂著 イカロス出版(株))